

「いま、この惑星で起きていること」

2020年2月24日

岩波の月刊誌『世界』に、気象予報士の森さやか氏が「いま、この惑星で起きていること」と題する連載を寄稿している。3月号は「動物たちの受難と生存への努力」で、温暖化による動物たちの受難の実態を書いている。営利と利便を求めて、急速に環境変化を引き起こした人間の罪深さを思い知らされる警告である。

ダーウィンがガラパゴス諸島で進化論のヒントを得たことは知られているが、鳥の名の由来でもあるゾウガメは激減し、絶滅危惧種に指定された。ガラパゴスには、陸でくらすイグアナと海でくらすイグアナがいる。海イグアナの餌となる海藻が海水温の上昇によって激減した。命を落とす海イグアナが多数出た中で、陸に這い上がって、陸の食べ物を求める雄が現れた。その海イグアナの雄と陸イグアナの雌との間に「ハイブリッドイグアナ」ができた。ハイブリッドイグアナは、海草を取るための鋭い爪をもらい受け、サボテンに登って餌を取ることができ、陸を闊歩して幅を利かせる存在となった。しかし、ハイブリッドイグアナは生殖能力がなく一代限りの命であるという。進化と言えるのか。

オーストラリアでは、記録的な干ばつによって、手の付けられない山火事が起き、日本の国土の3分の1に相当する森林を喪失した。12億匹もの生物が犠牲になり、いくつかの動物は絶滅したかも知れないという。コアラは3分の1に当たる8千頭が、カンガルーは50%に当たる2万5千頭が死んだ。砂漠の輸送手段として、インドから連れて来られたラクダは2万頭を超え、世界一のラクダ大国になった。そのラクダたちは水を求めて住宅を襲ったので、スパイナーによって5千頭が射殺された。環境に適応して繁殖した動物たちが、人間にもたらされた気候変動によって、命を奪われている訳である。

アフリカ東部では、サバクトビバッタが環境の変化を好機として、大量発生している。聖書にもバッタの異常発生による災いを記している。先日「東京新聞」に、バッタが異常発生した写真を掲載していた。サバクトビバッタは体長5センチ、移動速度は1日130キロ、1キロ四方で1億5千万匹にもなり、1日に300トンの穀物を食い荒らす。ソマリア、エチオピア、ケニアなどの国々で被害が出ており、温暖化に伴って、生息地域が更に拡大するリスクがあるという。

米国のシカゴには、高いビルが立ち並び、夜間の電灯がついたビルの窓に鳥の衝突事故が絶え間ない。1978年から2016年の約40年間で、鳥の種類は52種、7万羽を集めた。その鳥のサイズを測ったところ、縮小していることが分かった。40年前に比べ、体重は2・6%軽く、足の長さは2・4%短くなったというデータを得た。気温が上昇したことで体が小さくなったのではないか。この背景にあるのが「ベルグマンの法則」で、寒い地域に住む個体ほど、体が大きくなる傾向にあるという、進化の過程を裏付ける法則である。温暖化が、逆に体を縮小させたのではないかとこの解釈である。

世界最強の動物として太古から生き抜いてきたのは「クマムシ」である。クマムシは体長1ミリにも満たない微小な生物で、顕微鏡で見ると、パンパンに太った幼虫のように見える。南極、深海、温泉などにも生息し、強度の乾燥、高圧、低温、紫外線下でも死なない。クマムシは100度でも1時間耐えられるそうだが、38度では24時間以上で死んでしまう欠点が見つかった。温暖化にはついていられない可能性が判明したのである。

地球という惑星で、動物たちは命をつなぎたいと叫びを上げている。その叫びを聞いて、共存しようとする時、人間も自らの命を永らえるのではないか。